

第8回統一思想国際シンポジウム

6月24-25日、日本、神奈川

「人間と自然の調和：宇宙論的および神学的視点」

マヌエル・D・ブンザル

A. 地球的問題

1992年、リオデジャネイロでの地球サミット以来、世界中の印刷や放送（による）媒体は生態学の問題に関する特集記事を増大させてきた。彼らの印刷物やプログラムのあるものは、深刻な問題について語り、解決策について指導しているものはほとんどない。あるものは厳しい警告を発している。しかし、多くのものは差し迫った惨禍を植え付けている。この問題でどの側面を見ようとも、それは確かに地球的な注目を捕らえ、警告を示してきた。なぜなら、それは我々がみな住んでいる一つの惑星に申告にかかわるものだからである。我われの「母なる地球」以外に、人間と他の生命形態を育てることができる地球はほかにないからである。この惑星に対するどんな脅威も今日精力的に扱わなければならない。というのは、明日では遅すぎるからである。

問題の理解

荒廃し、徹底的に奪い取られた世界についての陰気な予告は、過剰に反応し、驚き慌てた想像力の産物か、はたまた心ない、破壊的な人間の所行の不可避の結果であるのかもしれない。しかし、荒廃し、徹底的に変貌した地球の地勢のシナリオを支持する多くの証拠がある。森林伐採のために、世界の砂漠は毎年1600万畝の割合で広がっており、また世界中で毎分、14畝の森林が伐採されているのである。雨林が消失するとき、何種類かの動物や植物が絶滅する。毎年、世界中で240億トンの生産的な表土が失われ、ほんの数十年前で人間の活動によって大気の構成が変えられてきた間に、オゾン層が深刻な損害を受けている。

地球がどうなりうるかについての恐ろしい予告は、もし我々がなお破壊的所行を続けていくならば、不可避である。しかし、それはそうならなければならない未来ではない。我々には選択があるのである。ごく単純に言って、土地や、空気、水、また我々が我々の惑星を共有し合っている何百種のもの（生物）への配慮もなしに我々が引き続き環境を減損させるのか、それとも、たった今この狂乱を終わらせる時がきたと我々が言うことができるか。実際、我々は、結局、本当に選択があるのだろうか。自然の破壊、種の絶滅、汚染された空気、そして人類の中毒は、人間が意識的に選択する選択肢として有効なのだろう

か。しかし、私は、我々が取っているコースは正にこれであると恐れるものである。地球上のどの部分や場所も人間の活動によって引き起こされる減損や汚染に触れられずに残されてはいない。世界中では何が実際に起こっているのだろうか、また我々はいかに母なる地球の生き残りのために潮流の向きを変えようとしているのだろうか。

90年代の十年が終わろうとするとき、世界は新しい時代の始まりにある。40年間にわたって国際情勢を支配した冷戦は終わった。同様に、その終わりと共に、世界経済の未曾有の軍備化の時代が存在した。東西のイデオロギー紛争はデタントの時代を先導したばかりでなく、超大国間の、またより少ない度合いではあるが、他の政府間においても、より大きな国際的協力とパートナーシップの見込みを生じさせた。確かに冷戦時代の後の新世界秩序は人類の未来にとって非常に有望である。しかし、新しい世界秩序において我々の惑星の環境の減損を逆転させる努力を考えなくては、人間の有望な未来のための我々の計画を作ることはできない。実際、私は母なる地球を救う戦いは、新世界秩序の組織上の関心事として、イデオロギー戦争に代わるだろう。

冷戦の間、目標は他者をしてその価値や行動を変えさせることであった。民主主義あるいは共産主義の信奉者を勝ち取ることが目指されていた。地球を救う戦いにおいて、目標は我々自身の価値と行動を変えることにかかっている。エゴシステムに対してエコシステム（生態系）の信奉者を勝ち取ることが目指されている。エゴシステムは、我々人間が我々自身を、この惑星に対する唯一の権利を持ち、他の種の生息をやみくもに無視してそれらを滅ぼし続ける唯一の種であると考えている。エコシステムのイデオロギーは、すべての生物が相互関連し、相互に依存していることを認める。国際的な政治的、経済的、および社会的な安定を維持する鍵は、すべての人種と掟の人間同士の真実の和合である。バランスのとれた生態系を維持する鍵は、地球の初めに定められた人間と自然との真実の和合である。

バランスのとれたシステムの展開 宇宙論的視点

あらゆる人間社会はそれぞれの創造の観念、宇宙——世界——がどのようにして生じるようになったについてのそれぞれの考え、を形成する。これは民間の宇宙論で、古い世代から若い世代へと受け継がれる彼らの創造の神話であり、それは若い世代のために、万人と有益に共存していくための彼らの手引きとなる。宇宙論は人々に存在し、また、充実した、健康的な生活を送るための理由を与える。サミュエル(Samuel)とバーネット(Bernet)が言っているように、「宇宙論は、人間の行動を、人間のためばかりでなく、生きた地球自体のためにもなるように方向づける仕組みとしての役割を果たしている」。(1)

今日、我々は深刻な環境問題に直面しており、確かにこれらのあるものは我々自身の仕業によるものである。これらの問題に照らして、我々は、我々の宇宙論はなにが間違った

のかと多分たずねるかもしれない。それは我々を失望させたのだろうか。しかし、宇宙論は本当に我々を落胆させたのだろうか。私は、宇宙論が我々を気落ちさせたとは思わない。むしろ、我々はそれとペースを合わせてこなかったのだ。我々は元の地球の観念との繋がりを失ってしまったのだ。我々はそのメッセージをもはや聞かないのだ。他の声の中で、科学も、我々の創造の観念を表現するために、聞いてきたところの声である。皮肉なことながら、我々の生態上の問題の大半が発してきているのも科学を通してなのである。我々の宇宙論との繋がりを再確立するために、我々は最初の宇宙の象を求めて、科学以前の文化に立ち返ってみなければならぬ。

以下は我々の宇宙の進化に関する近代的な思考とも相いれる宇宙論について語っている科学以前の文化の実例である。

アメリカのインディアンから、マヤのものがある。

すべてがあやふやで、すべてが静かで、すべてが沈黙しており、すべてが動かず、静止しており、空の空間は空虚であった。

米国の五大湖のシャイエンから。

初めには、何もなかった。マヘオ、「全霊」は空虚に住んでいた。彼は聞いたが、何も聞くものがなかった。彼は周りを見渡したが、何も見るものがなかった。ただマヘオだけが無の中に存在していた。

紀元前1世紀、中国から。

天地が形を取る前には、すべてはあいまいで、形がなかった。明確で明るかったものは、天の方へ引き寄せられていく一方、重くて、どんよりしたものは固まり大地となった。

南太平洋のソサエティー諸島から。

神々の先祖であり、宇宙の創造者であるタ・アロアは、悠久の昔から暗闇の殻の中に座っていた。殻は尽きることのない空間の中を回っている卵のようであった。

紀元前5世紀のアリストファネスから。

最初、混沌と夜の暗闇と広いタルタロス(Tartaros)とがあった。しかし、大地も空気も空もなかった。それから、黒い羽をつけた夜がその卵を生んだ。大竜巻によって生

まれ、暗闇の、量りえない懐の中で。そして、それから、季節によって向けられ、魅惑者、愛、輝かしき、輝きのうずまきが生じた。

これらの神話に共通のものは、無という観念とその無に存在しており、世界を創造しようと決意する霊的な力である。同様に、科学以前の人々の間には、紀元前4世紀にアリストテレスによって作り出された術語で、「原初の実体」を意味し、宇宙のすべてが創造される基本的な材料であるZlemを含む「宇宙的な卵」という考えがあった。

宇宙の卵理論は、いくらかの科学者の間に信奉者を見出だしている。カール・セーガン(Carl Sagan)は我々に、「今宇宙にあるすべての物質とエメルギーは極めて高い密度で凝縮されていた——一種の宇宙の卵で、多くの文化の創造神話を思わせる」。(2) 宇宙の卵という考えの後には、ジョージ・ガモフ(George Garmow)の「ビッグ・バン」理論や、またスティーブン・ワインバーグ(Steven Weinberg)の「爆発」理論(3) が起こり、宇宙の空間に満ちている、強い光と電子、陽子およびニュートロンの「宇宙のスープ」——それから我々が今日知っているような宇宙がやがて進化してくる——によって完成された。

惑星の地球が10億年前に太陽系に現れたとき、それは、生命が始まることができる前に、なおいくつかの変化を被らねばならなかった。しかし、生命が生じたとき、それは4つの元素でもって始まった——炭素と水素と酸素と窒素であった。これらの4つの構成ブロックは結合し、再結合して蛋白質と炭水化物と脂肪を形成する。これらは生きた細胞を生み出すばかりでなく、それらの生を通してこれら細胞を育て続ける。これらの基本的な物質は結合して、すべての種を形成するが、この種は時の始め以来、バクテリア、青緑藻類——それは地上の最初の生命形態であった——から、今日、豊富にいる何十万という植物と動物の種に至るまで、存在してきたすべての種を形成するのである」。(4)

我々が我々自身の始まりを、これらの元素にまでたどることができるのは、我々が地上のすべての生きた種と親近性を持っているらしく思わせる。あらゆる生命形態は、予定された過程である「分子の組織」として、科学的に示すことができる。分子の形成は、栄養素と、特定の温度域、それ自体守ることができないような毒素が不在であること、またそれを絶滅させるかもしれない略奪者の不在であることなどにかかっている。

すべての生物は「生態学的な適所」にはまるようになる。これは物理的な境界ではなく、その特定の行動——つまり、それがいかにエネルギーを変えるか、それがいかにその物理的および生物学的な環境に反応し、またそれを変革するか、また、それが他の種といかに相互作用を行うか——によって決定される有機体の適所なのである。この「生態上の適所」は単なる数十年ではなく、数千年を要する変化によって区分されるのである。もし生態上の変化があまりにも急激であるならば、有機体は順応できないかもしれず、死ぬだろう。

我々の技術と「インスタント」の過程の時代にあつて、我々はこの事実を良く認識し、

考えなければならない。

他のすべての種のように、一定の環境状況の設定から成長し、何百年にわたって起こった世界の変化に応じて進化した、ホモ・サピエンスは、地球がかつて知った最も劇的で徹底的な環境変化のいくつかを計画実行してきたのである。過去50年以内に、そしてまたいっそうの範囲と力を持って、人間は自らの「生態上の適所」を変貌させてきたのであり、そこは人間が他の何千という種とも共有（共存）している適所であり、その多くは、人間自身が生き残ろうとするならば、健全のものでなければならない適所なのである。

我々が改造している「生態上」の適所は、もはや我々にとってもまた他の種にとっても快適なものではなくなり、我々の体はもはやそれに安心していられなくなり、それはもはや病気から免れてはいないのである。地球の神話が我々に宇宙との関係についての視点を与えてくれるように、創造神話も我々に、自然や我々の周りにいる他の種との関係について視点を与えてくれる。必要とされているものは、人間と自然が、両者が犯されず健全でいられるために、生態上の適所を安定させ、安全に守るために、相和して働くことである。

創造の神学

科学以前の文化は、生きた地球の生の物語を描写し、神話がいかに人々に環境と調和して生活をする指示を与えたかを描写した。ホピの本の中で、著者は、インディアンたちがいかに、地球を自分たちのように生きた存在と見なしていたかを描写している。彼らは地球を母と見なしていた。彼らは地球の胎から生まれてきて、地球が彼らのために得られるようにした草やとうもろこしや動物によって栄養を与えられた。

この母なる地球に対する愛着、この地球に縛り付けられた哲学は、しかしながら、神なるものを自然界から締め出しはしなかった。科学以前の文化において、また多くの氏族社会において、神的なものは人間的で個人的な観点からは見られないが、にもかかわらず宇宙と地球を包含する、広範な霊の臨在の感覚がある。五大湖のシャイエン・インディアンたちは空間を舞う「全霊」をマヘオと呼んだ。多くの氏族の儀式では、焦点は親切な霊の世話をし、それを引き付け、悪意ある霊を追い出すことである。信仰者たちは例にとって不愉快な活動——例えば、霊の住みかであるかもしれない木を切り倒すとか——は避けるよう努力する。豊富な収穫を確保するために、農夫は霊の祝福を求め、良き収穫の後には霊に供え物を捧げる。

偉大な宗教伝統の勃興は、初期の人々が神的なものや、人間と万物の世界を見た見方に変化をもたらした。古代ギリシャにおいて、伝統的な精霊信仰的な宗教は、神々や女神の宗教的なわざに屈した。ギリシャ人の神理解は、西洋キリスト教の最初の源泉であった。2番目の源泉は聖書的な源泉である。

創世記第1章において、我々は次のように読む。

はじめに神は天と地とを創造された。地は形なく、むなしく、やみが淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてをおおっていた。

聖書の創造説話において、またもや（神の）霊が地の表面にいたとして明確に言及されている。しかし、この説話において際立っているものは、人格的な神が世界を創造され、世界はそれ自体、善であるということである。神はご自分が何をなしたかを思索され、それを見て、よしとされた（創世記1：10, 13, 18, 21, 26）。

聖書の創造の説話は科学以前あるいは科学的なアプローチの趣は持っていなかったものの、創世記の物語はより基本的な疑問――だれが世界を造ったか、そしてなぜ――に答えている。宇宙を造る神は自存し、宇宙を超越している。しかし、神の創造力はすべての存在に及ぶ。被造物において神の支配と連結されていないものは何もない。神の創造のほとばしりは、最初の男と女の創造において極致に達する。

われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り、これに海の魚と、空の鳥と、家畜と、地のすべての獣と、地のすべての這うものごとを治めさせよう」。神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。神は彼らを祝福して言われた、「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ。（創世記1：25-27）

聖書の創造の説話において、人はその創造主の相似性と類似性を与えられた。これは人間がホモサピエンスであること、また創造主が人間に神の被造世界に対する管理人とした理由を説明している。聖書の視点において、神の被造世界に対する管理権は、礼拝の姿勢で神の前に立ち、喜んで人間の事柄と被造世界の安寧を監督する責任を受け入れる、人間のすがたを思い起こさせる。

世界の創造における神的存在のかかわりは、聖書の伝統にだけ限られているのではない。以下の宗教伝統においても同様な説明がある。

イスラム教においては（コーラン32：4）

アッラーこそは、天と地と、その間にある一切のものを六日間で創り上げ（『コーラン』岩波文庫版より）

ヒンズー教において（マヌ法典1：5-6）

この宇宙は暗闇のかたちに、察知されずに、典型的な印を持たず、推論によって到達できず、不可知であり、いわば、深い眠りに完全に浸されて、存在した。

神の自存、自身識別できないが、このすべて、偉大な元素と残りのもの、識別でき

るものの創造が、暗闇を押しつけて、抑えられない力をもって現れた。

ユダヤ教において（ミドラシ、創世記 ラバー1：1）

建築士はさらにその頭からそれを建設するのではなく、部屋やドアを配置する仕方を知るために図面や図解を用いる。こうして神はトララーを参照し世界を創造した。

聖なる方が世界で創造されたすべてをその方は人間において造られた。（タルムード、アボット・デ・ラビ・ナタン31）

これらの宗教的な本文のすべてにおいて、核心的実在としてはっきりと現れるものは、宇宙の創造主は全能だが、愛する存在であるということである。一方、神は、人間が被造物の極致として神の被造物を楽しむように、神のかたちに従って人間を創造された。また一方、あらゆる被造物は宇宙においてその価値と目的を持っているので、聖書は人間にすべての生命と種を敬う倫理を教え、人間に環境と自然に対する管理権を担うよう思い起こさせる。人間がすべての被造物を主管せよという創造主の命令は制裁的な支配と理解されるべきではなく、自然界の調和と美とを高める道を先導することを意味していると解されるべきである。この考えは以下のテキストにおいて裏付けられる。

自然の神聖性

地と、それに満ちるもの、世界と、そのなかに住む者とは主のものである。（ユダヤ教とキリスト教 詩篇24：1）

地を行くけものでも、羽をひろげて飛ぶ鳥でも、みな汝らと同じようにそれぞれ集団をなしている。聖典の中で我らが言い残したものは一つもない。後日、みなお傍に喚び集められるであろう。（イスラム教 『コーラン』 岩波文庫 上 177 ページ）

この地は庭である 主、その庭師 すべて、だれもおろそかにされる者はない。（シーク教 アディ・グラント マグ・アスリトパディ 1, M. 3, p. 118）

木のただ1枚の葉、あるいは草のやわらかな葉さえにも、恐れを吹き込む神性が現れる。（神道 うらべーのかねくに）

すべての生き物に対する崇敬と非暴力

長く町を攻め囲んで、それを取ろうとする時でも、おのをふるって、そこの木を切り枯らしてはならない。それはあなたの食となるものだから、切り倒してはならない。あなたは田野の木までも、人のように攻めなければならぬであろうか。(ユダヤ教とキリスト教 申命記20:19)

野菜の伸びを破壊することは贖罪を要する罪である。(仏教 パシティヤ 11)

彼らは、(お前に)背を向けるやいなや、地上を走り廻って至るところで悪の種を播き、田畑や家畜を荒し歩く。アッラーは頹廃ということをいみ嫌い給うのに。(イスラム教 『コーラン』 岩波文庫 上 49-50 ページ)

すべての生き物に対して慈愛を持ちなさい。(ジャイナ教 タットワルタスラ 7. 11)

すべての生き物に対して全くの危害を加えないこと(あるいは実際の必要の場合、最小限の危害にとどめること)に基づく生き方こそ最高の道徳である。(ヒンズー教 マハーバーラタ シャンテ パルヴァ 262. 5-6)

科学以前の文化の宇宙論から、また宗教的集団の創造の神学から、人々は自分自身を最小の小石から天の最大の星座に至るまで、彼らの周りのすべてのものと密接に関係があると見ていたことは明らかである。しかし、生命は他の形態から離れてはいなかった。あらゆるものは関連している。あらゆるものは親族である。宇宙の共同体のすべての構成員は完全に和してお互いの構成員を支え合う。

ホピ・インディアンたちは地球を彼らの母として見上げた。タオス・インディアンたちは自分たちのことを父なる太陽の息子たちと考えていた。聖アッシジのフランシス(1182-1226)はその『被造物の賛歌』の中で、生きていようと、生きていまいと、すべての被造物との深い交わりを示した。聖フランシスにとって、すべての被造物はその兄弟姉妹たちなのである。兄弟なる太陽、姉妹なる月。被造物に対するこれらの見方は現代の地球に対する考えとはずいぶんと異なっている。近代の哲学者や著述家たちは、地球を不活性の塊りで、その運動は数百年前に始められ、その運命はあらかじめ定められ、動かさないものと見ている。実際、宇宙において死んで、固定されたものという地球の観念は、宇宙船の生態上の問題に対するその解決策は、単にその宇宙船を定期的に掃き、その船体を磨くことによって処理しうる、そのような宇宙船に比喻させるような滑稽なところまで至っている。

また、17世紀のその科学的な発見が我々の惑星である地球に対する有機的で全体的な

見方をくつがえすのに功のあり、それを複雑な、生命のない機械という考えに代えてしまった、フランシス・ベーコンやアイザック・ニュートン(1642-1727)のような哲学者もいる。さらに、創造主と被造物とを階層的なはしごへと効果的に差別する哲学的伝統が西洋に現れた。神、つまり神的存在はこの階層において最上階に位置しており、霊たちはそれに続き、次に人間、それから動物、そして最下層には最低の種というわけである。このパラダイムでは、霊たちは物質よりもずっと上回っている。しばしば物質的なものは霊的な実在と比べて、非常に高く価値づけられた。こうして、体は心と魂の独房として見られたのである。知的とか霊的な努力は霊を体または物質的な制限から解放することを目論んだものであった。

自然や動かない物体に関して言えば、それらはすべての霊の臨在(存在)を脱がせられた。神的存在または霊は物質的な実在を超越し、その上にあると見られた。天と地と人との間には亀裂が設けられ、特に地球の共同体の他のものとの近しい親近性や関係を切断した。地球について思考が科学以前の宇宙論の視点や様々な宗教の創造の神学から離別したことは、環境や自然の現在の悲しい状態について関(かか)わりがある。アイザック・ニュートンによって遡回しに言われたように、地球は、神によって作られた巨大な時計であり、神がそのねじを回し始動させた後は、それを放置したというようなものではない。地球はバックミニスター・フラウ(Buckminster Fuller)が我々に信じさせようとしているように――地球に対するその世話は車や道具の世話をすることと同じ仕方であろう――単なる宇宙船以上のものでもない。もし、我々の地球が生きた存在であるということが真実であるとすれば、我々は地球および地球の共同体の残りのもの――動くものと動かぬもの――との我々の関係や相互作用をさらに繊細な感受性をもって再評価しなくてはならない。我々は、我々の活動のあるものが明確に自然の体系の生命と健康を危うくしていると確信しなければならない。

もし偉大な諸宗教が、地球と地球上の被造物とが、奪い取り、減損させず、創造主の名誉と栄光のために用い、管理するために、人間の世話と管理のもとに置かれたと、我々に教えているとすれば、我々は今や、「人間の意識は被造世界の残りのものから切り放されており、自然は霊の存在をはぎ取られている」といった二元論的な思考様式を、今や、捨てなければならない。我々は、例えば、エゴシステムのために、エコシステムにおける他の生命種の急速な消失の責任があるということを認めなければならない。

実際的な適用

より実際的な意味で、地球と自然との人間の偉大な調和を達成することは以下の措置を伴うのである。

1. 地球の健康の向上

産業革命によって起こされた我々の惑星の搾取と非人間化は、今や、より思いやりのある、また人間的な態度に道を譲らなければならない。地球はよく我々を育て、我々を保護する。今度は、我々は、鉱石や他の鉱物をじぶんの懐の中に見出だし、これらをなんらかの長期的な結果に対してほとんど考えをいたさず、容赦なく掘る、不徳な鉱山の立者よりも、母なる地球に対して穏やかで、搾取をしないようにすることによって、恩返しをしなくてはならない。すべての生物と同様、地球もホメオスタティック（ホメオスタシス＝生物体が体内環境を一定範囲に保つ働き＝の形容詞形）である。それは環境やそれ自身における変化に順応することによって、それ自身を健康な状態に維持することができる。例えば、地球の「生物圏」（地殻を含む地球上および大気中の全生物生存圏；またその全生物）は、人間に有毒ともなりうる酸素の生産過剰の防止と、また、二酸化炭素を生成し過剰の量になると人間にとって有毒ともなりうる動物の手に負えないような繁殖の防止の原因となるものである。

こうして地球は大気中の気体の割合を維持し、しかも温度、海洋の衛生、また陸と海の酸と塩基のバランスを維持するホメオスタシスの役割を果たしている。

地球がこの自然な体系のバランスを成就するのを助けるために、我々はホメオスタシスの法則を尊重し、なんらかの物質がこのバランスの取れた体系を崩すのを回避しなければならない。産業の工場やモーター車輛からの有毒ガスの過剰な排出は、「生物圏」のバランスを崩した状態を起こしやすい。水路や海の過剰な汚染は海洋の有機的な体系に影響を及ぼす。

2. バイオダイバーシティ（生命の多様性）の向上

世界はこの十年のあいだに少なくとも9.6億人ほど人口が増加すると予測されている。この予測は、土地、水、材木といった主要な資源の一人当たりの入手可能性もまた未曾有の割合で縮小するだろうということを意味する。この巨大な人口のうねりの手当てをする過程において、森林地域からより多くの農耕地を開拓しなければならず、より多くの農地を住宅地に転換しなくてはならず、大衆輸送のためにより多くの道路や高速道路を敷設しなければならない。

地球に住む人間の数が上昇するにつれて、植物や動物の種の数は低下し、ある種は実際に絶滅する。環境破壊と公害は地球の生物学的な多様性を低下させている。

人口抑制の理論問題は政治的指導者や経済学者が科学者と教会指導者と共に一緒に真っ向から対処しなければならないが、それはさて置いて、急騰する人口統計の増加の第一の犠牲者はバイオダイバーシティ（生命の多様性）である。

森林の収穫や農作地の増大、また住宅地の提供に道を譲るために、環境が減ぼされるところでは、動物や野生の植物の種は一掃される。「生命の多様性」の絶滅は本当に範囲が世界的であり、北極圏限界線から南極大陸に至るまで起こっている。危機の震源

地は高温多湿の熱帯雨林にある。アマゾン流域において、約400平方マイルの森林が毎年、裸にされている。雨林がなくなると、動物と植物の種は攻撃されやすくなるか、危険にさらされるか、あるいはまた絶滅の生命種となるのである。

何をすることができるのだろうか。実際、我々が、多分、「産業時代」以来、「生命の多様性」の被害の範囲を評価するとき、なしうることは割合、少ない。自然保護主義者質は努力しているが、状況を原始時代の状況に逆転させることは出来ないでいる。

なすようにと提案されていることは、将来の世代のためにできるだけ多くの種を救うために、ある種の技術的な箱舟を造ることである。もう一つの提案は、残存している、絶滅の脅威のある種を保護できる保護区をとっておくことである。今、緊急に必要とされていることは、絶滅の脅威のある動物や植物が生き残りの戦いに負けないように、それらが人間の「味方」、彼らの支持者、スポーツマン、擁護者を持つということである。

3. 天然資源の使用の制限

地球からの原料の抽出、加工がおさまらないことも、人間の活動の最も破壊的なものに教えられるものである。伐木搬出が森林の生態系をだめにすることは、予告できる。木を適当な他の材木製品に変化させることは、いくつかの非常な汚染過程を伴う。鋳床の頂上にどんな生態系があれ、定期的な採鋳はそれを跡かたもなくするのである。金属を鋳石から生産することは多量のエネルギーを伴い、多量の汚染と浪費を生み出す。

その1977年の本『ソフト・エネルギーの道』において、アモリ・ロヴィンズは、社会の福祉が目的であり、エネルギーは目的ではなく、手段であると国家にチャレンジし、「国民は電気や石油を欲しているのではなく、むしろ快適な部屋、車の軽快な動き、食糧、テーブル、他の現実のものを欲している」と言っている。ロヴィンズZの考えに沿って、国民は材料を探しているのではなく、これらが提供できる便宜を探していると我々は言うことができる。家や事務所の建物を造るために用いられた木材、石、あるいは鋼鉄の量は、その構造が頑丈で快適な温度のままである限り、その占拠者にとっては非物質的なものである。地元の店から直接入手され、古い入れ物に入れて家に持って来られた米は、プラスチックのバッグに入れて持ってこられたものと同じくらいおいしく、栄養がある。

我々の世代の産業経済は莫大な量の原料とエネルギーを基盤として、その過程において過度に消費主義的な投げ捨て社会を生じさせた。本来、経済に入る材料の量は、その材料の最終目的地とか、人間に対するその貢献（度）について何も我々に語らない。しかし、それは、生産サイクルの両端で生態系に加えられる害について我々に多くのことを語ってくれる。産業経済に入る原料の大半は、やがて廃棄物として他の端では出てくる。

この問題を扱うために何をすることができるのだろうか。一つは、消費者は環境に優

しい製品を選ぶ選択権を与えられなければならないということである。精通した買い手による選択的購入こそ、生産者にとって低浪費で、環境に優しい商品を生産するためのインセンティブ（動機）となるかもしれない。リサイクリングももう一つの選択肢であり、突然、盛んに行われる慣行となった。他の廃棄物管理の選択案は、原料を減らすことと再利用である。一まとめにして考えると、原料を減らすことと再利用とリサイクリングは廃棄物を削減するばかりでなく、また人間に、被造物に対する賢明な管理人になるようにという創造主との契約を全うする機会を与えるものである。

結論

聖書において、ローマ人へのパウロの手紙（８：２２－２４）は、希望と宇宙的な贖いについて語っている。「実に、被造物全体が、今に至るまで、共にうめき共に産みの苦しみを続けていることを、わたしたちは知っている。それだけではなく、御霊の最初の実を持っているわたしたち自身も、心の内でうめきながら、子たる身分を授けられること、すなわち、からだのあがなわれることを待ち望んでいる」。

人間と被造物はエゴシステムからのあがないを必要としている。この内的変革は、自己中心性と命を否定する考えが人間によって捨てられ、また彼が意識的に、他の生命形態を減損したり、それらに対する自らの力を高めたりすることによってではなく、和合と保護を通してすべての被造物を生命のため再主張することによって生きるとき初めて、起こることだろう。

従って、我々の惑星である地球が通過している搾取と略奪にもかかわらず、希望の印がある。我々はただ科学以前の文化と宇宙論とを振り返るか、はたまた我々の宗教的な諸伝統の創造の神学について私たち自身に思い起こさせ、自然と和合して生活し始めればよいのである。冷戦の終結と共に、環境に優しい技術と維持できる進歩によって、我々はまもなく地球の表を更新することができるのである。